

学位論文題名

北国における雁木併設型集合住宅の 半屋内型共用空間に関する研究

学位論文内容の要旨

本研究では集合住宅の住棟低層部ないしは住棟間をつなぐ屋根付きの歩廊空間としての雁木に注目し、生活空間利用に関する詳細な観察調査によって使われ方の特徴と生活への効果の検証するものである。北国での雁木併設型集合住宅の特性を明らかにすることで、集住環境における半屋内型共用空間の新たな計画論を実証、探求することを目的としている。

「雁木」とは新潟・青森県地方などの多雪地帯において、民家の軒から差し出された庇で、その下を通路としているものをいう。伝統的な雁木は所有管理方式を含む共有の概念に基づき、多様な生活行為を可能にする共用の場を成立させている。本研究はこの視点をもとに、集合住宅の地上階にある半屋内型の通路を、雁木という用語を用いて定義している。北国では冬期の生活は著しく制約されるため、夏期の屋外生活を冬でも可能にする空間が重要といえる。既往の研究では、独立住宅にはない集合住宅の特質として、共用空間の積極的な活用と充実をはかることを提言している。これを背景に、北海道では住棟に付随する廊下などを共用部とする集合住宅が1980年代から建設され、現在では北方型と呼ばれる北国特有の形式へと発展してきている。雁木併設型集合住宅は、HOPE計画やふゆトピア事業による計画の推進、シルバーハウジング事業によるバリアフリー対応などの必要性から、建設の増加がもたらされてきた。しかし、2000年の公住法の改正、人口減少や住宅管理戸数の増大による既存住宅の建替や改善を促進するストック重視型の政策転換などが、雁木のあり方や計画方針を変えることとなった。北方型集合住宅における歴史は、雁木の建設に深く関係しており、本研究は集合住宅の雁木の現代的価値を再考するものである。

各章別に概説すると、第1章は、研究の全体構成と要点と題し、研究の目的と意義を明確にしたうえで用語の定義と論文構成の解説を行った。

第2章は、類型事例が存在する北国の通路空間のなかで、集合住宅の雁木を対象とする理由と位置づけを示した。主題に関する既往研究を概括し、本研究の位置づけを行った。集合住宅と雁木を扱う意義は、集まって住む価値や気候特性の対応などを記述し、北国における集住形式の利点を明示した。雁木に関しては古文献などを参考に、伝統的な雁木が形成された背景や機能、空間構成から、雪対策を前提とする北国特有の居住様式の知恵と共用のしくみを理解した。伝統的な雁木の共用概念は雁木の形態特性に限らず、住宅平面や街区構成にみられる工夫、所有管理方式の違いも影響しており、集合住宅の発展に不可欠な条件であることを明らかにした。

第3章では、調査対象とする雁木併設型集合住宅の形態的特徴を、北海道、東北、北陸の各事業主体から入手した全118事例の図面資料を用いて整理した。建設当初からの雁木の形態概要を時系列で表し、雁木と生活との関わり方の変容を概観した。既存のものは北海道に大半が建てられて

おり、青森県では雁木の連続性が高いことを明らかにした。両地域では雁木の開放度合いに違いがみられ、連続性と開放性が日常利用に深く影響することを形態分類から示し、調査対象団地を選定した。以上で得られた知見をふまえ、雁木と生活との関係を4つの生活行為別にとらえ、北国における夏冬両季節を比較する新たな現地調査方法を体系化した。

第4章は、雁木が北国の通路空間として適切に機能しているのかを評価した。通過行為に関する利用実態とともに、雁木空間の使い込み方を雁木の開放性とももの配置の双方を視点にとらえ、管理の仕方についても言及した。雁木の動線計画については、団地中央部を幹線となるように配された住棟間雁木では、居住者が集まりやすく近隣関係を良好にしている事例が示された。通学路や子どもの遊び場として地域に開放している団地もあり、居住者のみならず地域の核となる機能を有する可能性を論じた。雁木の開放性は雪対策への機能が絶対条件であり、最低でも一方に壁面が入っていれば、ものの搬入などの利便性も増すことを明らかにした。

第5章では、雁木が夏冬での集いの空間としての使われ方を把握した。滞在静的行為は住戸近傍空間である住棟付属雁木で主に展開され、雁木の囲み程度の高さ住戸内生活へのプライバシーにさほど影響がないことが利用を促す要因と把握できた。季節別での利用の特徴は、冬期は暖を採るなど近隣生活の場としての機能がガラス戸で囲われた雁木で確認でき、あたたかい共用空間の必要性が把握できた。夏期は雨や日差しを防ぐ場として内外の空間を一体的に利用しており、雪対策として計画されてきた雁木は、夏期の評価の方が得られている実態も示された。総じて、通年での利用を可能にするには、片面開放の雁木がふさわしいことが明らかになった。

第6章は、雁木の連続性と外出行動との関係の分析を行った。雁木の連続度を算出し、度合いによる滞在動的行為の違いを示した。居住者が自主的に雁木を利用している実態把握を通じて、健康への寄与、近隣生活の活性効果などを検証した。滞在動的行為では歩行不自由者が健康の維持、回復のために雁木を利用している事例が注目でき、ヒアリングから居住者の改善ぶりを明示した。雁木の連続度が確保されるほど活動は多岐にわたり、連続性の重要さが示唆された。利用実態としては、夏期は開放度の高い住棟間雁木、冬期は閉鎖性の強い住棟付属雁木と季節に応じて使い分けることで、通年での活動を可能にしている工夫が理解できた。

第7章からは住戸内部に視点を移し、19戸に関する住戸図面とヒアリング調査の内容をもとに、雁木の生活利用に応じた住戸平面のあり方を分析した。雁木に面する部屋の使われ方と開口部の有無に着目し、住戸の開放性や屋外への視認性などの違いが住評価や意識に与える影響を整理した。雁木は北側に配置されている場合が多く、内部の暗さや路面の凍結などの問題から日当たりのよい雁木を望む居住者意識が把握できた。雁木と住戸との空間的なつながりについては、雁木に公室が面するプランの有効性と、住戸の開放性への要求の高さが確認できた。以上から、雁木と居間とが併設する住戸と、日当たりのよい雁木の配置の提案へ結びつけた。

第8章は、第4～7章までの実態調査で得られた2点の計画提案をもとに、新規の団地を対象に実現の可能性を検討した。住戸内部の調査では、実際に雁木に面して居間を配置している居住者が確認でき、住評価から具現性が十分に期待できることを論じた。住棟を雁行して配置し、住戸と雁木の間に緩衝空間を設ける工夫は、プライバシーへの配慮や住戸前のたまり空間として評価でき、新たな住棟計画のあり方を示すことができた。メゾネット型の住戸形式は、日当たりの問題を解消するのに効果的であり、雁木と住戸との関係を有機的にしていることが示された。雁木は東西面や南面に配し、住戸との境界をゆるやかに形成する計画が望ましいことを明らかにした。

第9章では、以上の検討結果をもとに総合考察を行った。要約を総括し、(1) 雁木による新しい集住のライフスタイル、(2) 新北方型集合住宅計画論の2点について方向性を展望した。そして、半屋内型の雁木を生活共用空間として位置づける新たな集住様式を提案した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 角 幸 博
副 査 教 授 小 林 英 嗣
副 査 教 授 越 澤 明
副 査 教 授 月 舘 敏 栄 (八戸工業大学)
副 査 准教授 森 傑

学 位 論 文 題 名

北国における雁木併設型集合住宅の 半屋内型共用空間に関する研究

北国では冬季の日常生活、特に外出活動が著しく制限される。そのため古くから、新潟・青森県などの多雪地域においては、近隣住民が共同で民家の軒から差し出された庇を連続させることで雪や寒さから守られた屋外通路を確保する「雁木」が存在している。本論では、今日の集合住宅に見られる半屋内共有空間を雁木の視点から再評価することで、現代の集住における多様な生活行為を実現する共用空間のあり方と雁木空間の可能性について論考している。

第1章では、研究の目的、動機と意義、方法、論文の構成について述べている。

第2章では、伝統的な雁木が形成された背景や機能、空間構成を整理し、雪対策を前提とする北国特有の居住様式とそのしくみを再確認している。それを踏まえ、集合住宅における雁木の仮説的な価値をまとめている。

第3章では、北海道、東北、北陸における118事例の集合住宅の図面資料をもとに、雁木併設型集合住宅の形態的特徴を整理し、既存の雁木は北海道に大半が建てられており、青森県では雁木の連続性が高いという実態を把握している。また、両地域では雁木の開放の度合いに差異が見出され、連続性と開放性が日常利用に深く影響することを形態分類から考察している。ここで得た知見をもとに、雁木と生活との関係を4つの生活行為、つまり「通過行為」「間接行為」「滞在静的行為」「滞在動的行為」でとらえ、北国における夏冬の活動実態を比較する調査方法を構築している。

第4章は、通過行為と間接行為に注目し、雁木の北国の通路空間としての基本的な機能について評価している。雁木の動線計画については、団地中央部を幹線となるように配された住棟間雁木では、居住者が集まりやすく近隣関係を良好なものにしていると評価している。また、通学路や子どもの遊び場として地域に開放している団地を取り上げ、居住者のみならず地域の交流の場となる機能を有する可能性も論じている。

第5章では、夏冬での集いの空間としての雁木の使われ方を分析している。滞在静的行為は住戸近傍空間である住棟付属雁木で主に展開されているため、雁木の囲み程度の高さと住戸内生活へのプライバシーへ影響の少なさが利用を促すとしている。季節別の特徴として、冬期は暖を採るなど

近隣生活の場としての機能がガラス戸で囲われた雁木で確認でき、あたたかい共用空間の必要性を指摘している。また、夏期は雨や日差しを防ぐ場として内外の空間を一体的に利用しており、雪対策として計画された雁木は夏期でも評価が高いことから、通年での利用を可能にするには片面開放の雁木が有効であると論じている。

第6章では、雁木の連続性と外出行動との関係を分析している。雁木の連続度を算出し、その度合いによる滞在行動の差異を明らかにしている。例えば、歩行不自由者が健康の維持、回復のために雁木を利用している事例など、雁木の連続度が確保されるほど活動は多岐にわたることから、雁木の連続性が外出行動を誘発するうえで重要であると指摘している。

第7章では、雁木の生活利用に応じた住戸平面のあり方を分析している。雁木に面する部屋の使われ方と開口部の有無に着目し、住戸の開放性や屋外への視認性などと住評価・居住者意識との関係についてまとめている。特に、多くの事例で雁木が北側に配置されている現状に対して、居住者がより日当たりが確保された雁木を望んでいることを明らかにしている。

第8章では、雁木を積極的に計画に取り入れた新規の集合住宅を対象としてケーススタディを行っている。住棟を雁行に配置し住戸と雁木の間には緩衝空間を設ける工夫は、プライバシーを確保しながら住戸前のたまり空間を生む効果的な住棟計画であると評価している。また、メゾネット型の住戸形式は、日当たり問題を解消するうえで有効であり、雁木と住戸との有機的な関係を可能にしていると評価している。それらを踏まえ、雁木は東西面や南面に配し住戸との境界をゆるやかに形成する計画が、集合住宅において望ましいと結論づけている。

第9章総括では、①雁木による新しい集住のライフスタイル、②新北方型集合住宅計画論の2点について展望している。そして、半屋内型の雁木を生活共用空間として位置づける新たな集住様式を提案している。

以上のごとく、筆者は、北国の集住環境における半屋内型共用空間の新たな計画論を、その歴史性を踏まえながら雁木の現代的価値を基軸に打ち出しており、その成果は建築都市学、建築計画学、住居計画学に対して貢献するところ大なるものである。よって筆者は、北海道大学博士(工学)の学位を授与される資格あるものと認める。